

國學院大學栃木短期大学
日本文化研究 第5号 抜刷
令和三年二月二十八日 発行

〈學術論文〉

一九五〇年代の民話から「現代民話考」へ

— 瀬川拓男と松谷みよ子の「民話」 —

野村典彦

〈学術論文〉

一九五〇年代の民話から「現代民話考」へ

— 瀬川拓男と松谷みよ子の「民話」 —

野村典彦

児童文学者である松谷みよ子（一九二六～二〇一五）ない。

の『現代民話考』全十二巻（一九八五～九六・立風書房）
 は、現代の伝承に目を向けた業績として民俗学・口承
 文芸研究においても評価されている。ただし、民俗学
 者が拒絶した左翼運動の側面をもち、創作の営みでも
 あった「民話」が、民俗学・口承文芸研究と相互に認
 め合う関係を築く道筋の確認は十分であるとは言え

め合う関係を築く道筋の確認は十分であるとは言え

一 足の民話

山本安英「夕鶴」巡回公演の中から」や「座談会

民族演劇の課題」（中村翫右衛門・木下順二・鈴木政男・下村正夫）などが掲載されているのは、雑誌『新劇場』第一巻第一号（一九五一）。この雑誌の第一巻第三号（同年）、高山貞章「劇団人形クラブの出版にさいして」の冒頭には「第二次大戦後の、日本の民主的な人形劇は、劇団ブークの活動を中心に一応全国的な規模で大衆の間に普及され、相当数のサークルもできて日本人形協議会の結成となつて、発展してきたのですが、昨年共産党その他民主陣営に対する弾圧が強化されるに従つて先づブークの活動方針の中に、非人民的な傾向が現れはじめ、職場サークルにもレッド・パージ等でかなりの打撃をうけるようになったのです」といった記述があり、当時の状況を伝えてくれる。この高山の文章の前に置かれているのが、瀬川拓男「そだちゆく人形劇団人形クラブ」である。「（一）第一次千葉工作の失敗から」節は「この短期間の工作活動を通じて私たちは非常に多くの教訓を学びとつた。大衆のよりよい友となり、何時どんな時でも、たとえ一人ぼっちになつても人形をもつて大衆を励まし元氣げんきづける事の出来る人民の芸術家になる為に、まず全員が一致団結

して中共の文工隊の精神を自分達のものにしようと励まし合つた」とまとめられている。「（二）三島での文工隊活動」節のむすびには「文工隊活動はまさに私達の小ブル性を一枚一枚はぎとり不断の自己変革を可能にする」という言葉もある。

松谷みよ子は一九五一年に『貝になつた子供』で第一回児童文学者協会新人賞を受賞。児童文学者として頭角を現す。一九五四年には、藤城清治の影絵かげえが表紙を飾る『絵本木馬』にいくつかの童話を掲載している。「童話 夜」を載せた七号（一九五四）には、瀬川拓男「ある山での人形芝居」も載っている。

松谷は、一九五二年に職場労組の女性と人形サークルを結成、指導にきた人形座の瀬川と出会い、「民話の会」「民族芸術を創る会」に参加するようになっていた（松谷・二〇〇七）。松谷は「病身のため、ほとんど数えるほどしか二つの会に出席していないけれど、遠い海鳴りを聞くように、民族の鼓動を感じた」と振り返っている（松谷・一九七四）。

この民話の会が、一九五六年に刊行した『民話の発見』の「あとがき」をみると、「都会という狭い地域

内」での活動だったことを省みつつ、次のように述べる。「農村においても、都会においても、民話を劇化する運動、民話劇を上演する運動、教育の中で民話を生かす運動、人形劇として上演する運動、幻燈に民話を題材とする運動、その地方の民話を採集し、再話する運動、お話会の中で民話を生かす運動、紙芝居として行なう運動、伝統芸術の形式の中で民話を生かす運動、学校劇として生かす運動、児童文学や子供の絵本として民話の本質を生かす運動、等々、数えきれないほどの多種多様な動きが、学校の教師によって、村の青年団によって、幼稚園の保母さんによって、あるいは若い人々の読書サークルによって、展開されはじめている」。

一九七四年に発表された「戦後の文化政策をめぐる党指導上の問題について」^{〔注2〕}を引用しながら、一九八五年に吉沢和夫が次のように述べている。「こうした誤った指導の影響が民話運動にも大きく影を落としていたことは否定すべくもない事実であろう。民話を資料として民族文化の中に埋もれている日本民族の革命的伝統を発掘しよう、といったテーゼがそこでは大きい

しかかっていたのである」(吉沢・一九八五)。日本民俗学が「民話」を受け入れられなかったことについては、広く知られる通りである。

小熊英二は、「一九五五年七月の六全協による、日本共産党の方針転換」が国民的歴史学運動への「とどめの一撃」となったとしている。「山村工作隊をはじめとした武装闘争路線は「極左冒険主義」だったと総括」されたのだと小熊は言う(小熊・二〇〇二)。

文化工作隊として人形劇上演の活動をする瀬川との出会いは、松谷の民話への関心が国民的歴史学運動のうねりの中で育まれたものであることを物語る。その後、五〇年代の民話運動が終焉を迎えようとする頃には、「その地方の民話を採集し、再話する運動」の継承をしつつ、瀬川と松谷は新たな段階へと踏み出していった。二人の共編『秋田の民話』(一九五八・未来社)の巻末に瀬川の「秋田の民話について―その採集と再話のこと」が掲載されており、結びの段落で瀬川は自分の仕事を位置付けている。「私たちが自分の仕事を「足の民話」と「創作の民話」とよんでいるのも、実は足であるく採集や再話の仕事を母胎としながら、

これらの地方の人々の合作の上に、力強い創作の成果と、新しい芸術の開花を目指しているからにほかならない。ともあれ、その輝かしい可能性のために、もつと地味に、もつと根強く、足であるきほりおこし、祖先の残した遺産に光をあたえる民話の採集者や再話者が現われてほしいと思う」。

まず、瀬川が明確に示しているものが、「創作」と「足」であることを押さえよう。

二 未来社『日本の民話』の始動

『未来』一九七一年三月号に、瀬川拓男は民話の会が活動を終えた頃を振り返って言う（「民話再創造シリーズ覚書」）。「都市的な知識人を軸にしたこの会が解体せざるをえない矛盾をみていた私は、当時、未来社の西谷さんと話しあって、ひろく地方の人材を組織するために、日本民話の再話シリーズを企画いたしました」と。そして、「地方に根強いタテ社会的な人間関係は、ともすると前近代的なナシヨナリズムに道をひらく危険もあるわけですが、民話を母胎とした運動は「民衆」という平面において、ヨコの関係を強化し

ていきます」と、運動のねらいを記している。

七五巻まで刊行（その他に「別巻」が四巻）されたこのシリーズは、デイスカバー・ジャパンの頃には合冊にされるなど、姿を変えながら、全国の図書館、学校の蔵書となった。二十一世紀になってからも新版にされて都市部の大型書店に並べられ、シリーズとして各地の民話を紹介するものとして現在唯一の出版物となっている。先ほど触れた『秋田の民話』もこの「日本の民話一〇」として刊行されたものだ。シリーズ一冊目は、『信濃の民話』だった。奥付の編者は「信濃の民話」編集委員会だが、すべての再話は瀬川と松谷とで行われ、「はしがき」もこの二人の連名となっている。

確認できたところでは、一九五八年六月に刊行された『阿波の民話』一刷あたりから、『日本の民話』シリーズの奥付に「無断脚色、上演、放送、再録」を禁ずる断り書きがある。先ほど『民話の発見』「あとがき」で確認した通り、当時の「民話」は「上演する」ものであった。瀬川と松谷を中心とする劇団太郎座の第一回本公演「たつ子太郎」の上演は一九六一年である。

新婚の瀬川・松谷も含め、葛飾区金町で集団生活をし、「上演」に関わった人々の中には、サンカの世界を連想させる作品を後に発表する白土三平もいた〔松谷ほか・一九八二〕。

さて、瀬川が目論んだ「ヨコの関係の強化」とは、「民衆を分散して支配することを有利と考えた支配階級」〔吉沢・一九五四〕に対する労働者の連帯である「ヨコの関係」として読むべきものだが、ここではあえて、工作隊とは別の角度から、「足の民話」を考えておきたい。

三 『忘れられた日本人』と民話

民俗学者であって五〇年代の民話運動にも関係していた宮本常一は、一九五八〜六〇年に発表した文章で、当時の民話について、「文字に表現せられたものの中からのみ問題をよみとろうとする方法のせまさが、伝承しようとする人たちの意志や表現からは遠いものになって来ようとしている」〔宮本・一九五八〕と批判し、「戦後の民話はこれが必要とする人々が、村里の古老からじかに耳をかたむけて得たものでなく、古老から

きき出して整理せられたもの、あるいは脚色せられたものに利用価値を見出した」〔宮本・一九六一〕と判断している。

様々な角度から評価することのできる雑誌であるが、「都会という狭い地域」で議論するだけでは、人々の実際から離れてしまうのだと気づいている足の民俗学者が、『民話』に参加していた意味は大きい。

「基準昔話の選定と公表」、「類型昔話の搜索と比較」を提案し〔柳田・一九三一〕、『日本昔話名彙』を編纂するに至った柳田の学問は、やはり、現場とは距離のあるものだった。背景を切り捨て、話を重ねる柳田に対し、自分にとってたった一つの伝承の意味を問う。「民話」という試みは、話を担う「民衆」を浮き上がらせる視座であったといえる。益田勝実は、自分が父親から聞かされていた「厚狭の寝太郎様」について、「大きくなって、柳田先生の『桃太郎の誕生』の中に、大阪朝日に載ったこの伝説のことが引かれているのを知った時は嬉しかったが、先生はこの寝太郎が全国の「寝太郎」説話の一つであることにすぐ話を進められて、わたしの父が寝太郎様に対して抱いていたような

気持ちに触れられなかったのに、一寸もの足りない気がした」と、不満を漏らしている（益田・一九五七）。だが、そういう彼らの議論もまた、都会の机上のものだと宮本は感じていたのである。

そうした宮本の『忘れられた日本人』は、「泥にまみれた庶民の生活そのものの中に、人の生きる明るさ、たくましさをとらえようとする」と読みとられた（網野・一九八四）。それぞれが名をもち、一人ひとりの顔が想像される名著とされていた。しかし、「庶民自身の語りを再現した名品、「民話」を生み出し伝承する共同体のあり方を生き生きと伝える文章」（網野・一九八四）であるとの高い評価は、今日では覆っていると言わざるをえない。

岩本通弥は、「資料的な捏造や改竄が明瞭となった現在、『忘れられた日本人』の放手しの絶賛は破綻している」が、市民運動と民俗学の関係を考察する上で重要な先行例として宮本常一のあゆみを捉えようとする。「実践的成果を優先させる」宮本には「科学性を逸脱」するところがあり、同書を「再創造の作品だとすればよかっただろう」と、その後の宮本の資料の

扱いを批判する中で指摘する（岩本・二〇一二）。

岩田重則は、ノンフィクションは「事実」に忠実であることを求める」のに対し、「忘れられた日本人」は、事実」に忠実であろうとしていない」ので「ルポルタージュとも異なっていた」と評している。それは、木下順二が「鶴女房を『夕鶴』として『再話』した創作スタイルに類似する方法であったのかもしれない」と位置づける（岩田・二〇一四）。

先ほど引用した『民話の発見』を評した宮本の文章が、一九五六年の『文学』（第二四巻第五号）にある。「私は民話の発見は同時に農民の発見でなければならぬ」と思っている。しかしこの書物ではまだ農民を外側からながめて、それぞれの立場から物を言っていると言っている」と述べる。宮本が発見してきたところでは、「農民は本来素朴で健康なものだ。形容詞の必要はもたなかった。それは語り言葉にニュアンスをもたせるだけで十分であった。感情がそのまま行動でもあった」とのことである。そして、農民の発見が、「農民をめぐる人々が執拗にうえつけた農民の卑屈感、劣等感をぬぐいさるもの」であった時、「農民たちはい

ままで自己の中にうっ積していた数々のものごたりを皆さんのまえに、ごく自然的な、らかな気持ちで示すだろうし、また新しい民話をつくり出し、ゆくだろう。そして農民はそういう共感を一般にもとめているのだと言う。『民話』という雑誌に「年よりたち」を描いていく宮本の、基底となった思いだったのではないだろうか。

吉沢和夫は『河内国滝沢左近熊太翁旧事談』（一九三七）に感動し、宮本の名を印象に残していた。その後、木下順二の指示により吉沢が渋沢敬三邸に宮本を訪ね、『民話』編集委員に加わることを要請したのだという。編集委員が話をする中で、吉沢や益田勝実が左近翁への聞き書きを高く評価し、宮本の連載が開始されている。（吉沢・二〇〇三）。

「年よりたち」の掲載は、『民話』第三号（一九五八年十二月）〜第二一号（一九六〇年六月）、『忘れられた日本人』（未来社）は一九六〇年七月の刊行だった。「年よりたち」の後継者のように聞き書きを『民話』に掲載したのは、大庭良美である。一九四一年に柳田に報告を送って以来、石見国日原での聞き書きを

重ねた大庭の文章も「農民の発見」だったと言えよう。読点ではなくカンマを用いて、横書きで記された『西石見の民俗』（和歌森太郎編・一九六二・吉川弘文館）と較べてみると大きな違いに驚かされることになる（野村・二〇一二）。その頃、大間知篤三、関敬吾ほかの編による『日本民俗学大系』全十三巻（一九五八）を刊行していた平凡社は、宮本らの監修による『日本残酷物語』（一九五九〜六〇）をも刊行していた。谷川健一の名は、編者、執筆者ではなく「編集部」の中に並ぶ（二巻、五巻「月報」）。『忘れられた日本人』の「土佐源氏」は、『日本残酷物語』に収められた際の加筆を経ている。ちなみに『民話』第十八号（一九六〇年五月）には「鼎談 残酷ということ——日本残酷物語」を中心に（岡本太郎・深沢七郎・宮本常一）が載る。

平凡社は、宮本常一、大藤時彦、鎌田久子を編集委員とする『風土記日本』全六巻を一九五七〜八年に刊行、版を重ねている。毎日新聞社は和歌森太郎、大間知篤三、関敬吾らを編者とする『日本人物語』全五巻を一九六一〜二年に刊行しているが、宮本常一は執筆

者として名を連ねる。こちらは、六九年には五巻それぞれが「軽装版」として再刊された。

「ルポルタージュ」という言葉を手がかりにすれば、「足でかせぐ」(大月・一九九五)ことによって人々の生活をすくいあげようとする諸々のいとなみが、民俗学と裾野をともにしていたことを思い出せるだろう。テレビ番組として『新日本紀行』も人気を集めていた。こうした状況の中から、民俗学が「科学」になろうとすることは、一般読者の興味から民俗学が離れようとすることでもあった。サンカの描かれ方がノンフィクションから文学になっていくのもこの頃だっただろうか。

ともあれ、「宮本常一」は、一般の読者に届く民俗学者の名だった。本稿で資料とするところの角川書店『日本の民話』全十二巻も、「監修 宮本常一、野坂昭如」として刊行される。

四 松谷みよ子の「採訪」

松谷の師である坪田譲治と、トルストイの影響を強く受けた戦前の「民話」との関係は、既に明らかにし

てある(野村・二〇二〇)。加藤一夫は「トルストイの生活を実践すべく田舎と自然へ還つたいわばトルストイヤン」(阿部・一九八九)であったのだが、彼の発行する雑誌『科学と文芸』の編集を、坪田は手伝っていた(坪田・一九七一)。一九二八年に、加藤は「農民文芸の正系は、実に、神話や伝説や民謡や民間舞踊によつて伝へられたのである」と述べている(加藤・一九二八)。「土の芸術」として戦前の農民文芸運動の中で「民話」の語を用いていた大田卯は、この加藤の言葉を、「神話」を「民話」に置き換えて引用し、農民文芸運動を振り返った(大田・一九五八)。

吉沢和夫は、「柳田国男の指導の下に昔話の採訪と記録が見事に開花した時期」に再話に取り組むようになった坪田譲治の仕事を、「文献に拠る再話と、土に根ざした民話の記録に拠る再話」の「境」と位置づけている(吉沢・一九九一)。

松谷と瀬川、結婚直後の二人は「全国昔話記録」を手採訪の旅に出た。一九五六年のことだという。「恩師である坪田譲二先生から借金したり」して旅に出た(松谷・一九七四)松谷には、「土の芸術」を模索した

戦前の「民話」も流れ込んでいたはずである。^{〔註〕}

さて、「聴く 語る 創る 第二八号 特別号 日本民話の会五〇年のあゆみ」(二〇一九・日本民話の会)の「五十年のあゆみ」は一九六九年に始められている。一九七〇年の最初の記録は、「一月二〇日〜二日 長野県下水内郡栄村(秋山郷)探訪」。「むかしむかしの会」の例会記録を二回はさんで四項めが「六月一日 会名を「民話の研究会」として活動開始(子どもの文化研究所)」である。

同誌の「前史」の項は、一九六六年頃、童心社の松谷みよ子の出版物に関わったものたちの勉強会「むかしむかしの会」についての記述に始まる。活動の中心に松本新八郎がいたことが確認できる。そして、松谷のそばにいた大平純子が國學院大學で大島廣志、米屋陽一と交流をもった一九六七年が組織作りの第一歩とされている。

ここで、「フィールドワーク」を何と呼称するのか、という素朴な問題に触れておきたい。地理学では「巡検」である。佐々木喜善が「昔話採集家」を肩書きとしたことに注目した石井正己は、「採集」「調査」「探訪」

「取材」の四つの言葉を比較する中で、折口信夫が「探訪」を使ったため、國學院大學で学んだ者は「探訪」と呼称する^{〔註〕}と述べている(石井・二〇〇〇)。松谷みよ子や日本民話の会が「探訪」の語を用いてきたことと、学校の怪談に注目した常光徹も含め、学問として口承文芸研究の基礎を大学で学んだ者たちが会を支えていることとは無関係ではない。

ひとまず、「現代民話考」が生み出されるまでを、一度整理しておく。

松谷の民話は、「民衆の闘い」(吉沢・一九五六)であった一九五〇年代の民話運動を単純に引き継いだものではない。都市の知識人の議論ではなく、土に触れる農民の直の「声」の大切さが松谷らの活動の基盤にある。それは、表面に明確に確認できるものとして、民話に導いた瀬川拓男や民俗学の研究者たちの営みに学んだものである。ただし、伏流として、戦いを好まず、「農」や「土」と親しんだ大正・昭和初期の「民話」の思想を考えておいてもよいはずだ。

『民話の手帖』創刊号(一九七八)の奥付を見れば、「発行人 吉沢和夫」とある。松谷の活動は吉沢和夫によつ

て見守られていた。吉沢が開会の言葉を述べた日本民話の会十周年記念「明日の民話を語るつどい」の写真には、松本新八郎や『民話』創刊号に「現代の民話」を掲載した西郷竹彦のほかに、宮本常一、野村純一の笑顔が見える。ここに坪田譲治を加え、松谷の「民話」の後支えが理解されてくる。

五 「汽車に化けた狸狐」への注目と「現代の民話」

具体的に瀬川・松谷の仕事を見てみよう。まずは、未来社の『日本の民話』。昔話伝承の研究資料とすることを禁じられてきたのは、伝承そのものの報告ではなくて「再話」であるからだ。^{注11)}

『秋田の民話』「秋田の民話について」のなかに、「信濃の旅」とも交差させながら「いわゆる明治以後のはなし」に言及している部分がある。「戦争のため多くの日本人が外地で死んだ。そのとむらいにからすが海をこえて外地へいった。それで戦争が終るまでからすの姿が見えなくなった……」。「現代民話考」という大きな結実を見せることになる松谷の「現代民話」が、瀬川との「足の民話」の歩みの中で見出されていた。

民話の思想の大きな曲角に、瀬川の「足の民話」を忘れてはならないだろう。

後に『民話の手帖』創刊号で松谷は「現代民話考」を始動させる。読者にアンケートの問いかけをした最初の話題が「汽車に化けた狸狐」であった。

「昭和三十年、信州へ初めて民話採訪に出た折」、この話に出会った。『信濃の民話』「桔梗ガ原の狐」の結びの部分である。松谷はその後、明治十一年に高輪八ツ山における狸のエピソードが新聞記事にあることと、佐々木喜善『東奥異聞』に同様の狐の話があることを知ったという（松谷・一九七八b）。「桔梗ガ原の狐」は、『民話の世界』（一九七四）第一部「民話との出会い―山を越えて―」でも具体的な民話の第一に取り上げていた。松谷の「民話」の中で、この話の占めるものは大きい。「いま私が踏みしめているこの土地を作りあげ、支えてきた人々」、それが「祖先」なのだと松谷はこの話によって気づいたと述べる。

その後、瀬川・松谷の共編^{注12)}により、角川書店から刊行した『日本の民話』全十二巻（一九七三～七四）も、二〇〇万部を越すベストセラー」（大島・一九八一a）

となったのだが、ここにも「汽車と人間」の節を設けている。かつての農村、漁村に出現した汽車という近代の暴力が引き起こす摩擦は、「民話」を模索する彼らに大きな気付きを与えたものと思われる。一話めは和歌山県の話。「汽車のおかげで、三輪崎港は廃港同様になつてしまふ」「わしとこのたんぼの牛なんぞ、汽車にたまげて仕事ならんわい」と、鉄道を受け入れられない人々が描かれる。四話めは、山陰線の諏訪山トンネル工事の際に狐を殺したところ偽汽車が出現したという話。再話は清水真^三司^三。

角川書店『日本の民話』第十二巻「現代の民話」において、この後の「民話」活動の基盤が整えられたとみてよいのではないだろうか。「汽車と人間」のほかに、「学校の怪談」は旧制姫路高校の寮や旧制青森師範、旧制福井師範の寮の話。早い時期の担い手や伝承の場が透けて見える。「戦争の民話」の中には「お巾に行つたからす」と「まちんと」。前者には「長野県」と伝承地が示されるが、後者は「松谷みよ子」。「小島前生」譚を用いた創作であるからだ。平和への願いをこめられたこの二話は、後に司修の絵を得て偕成社から絵本

として出版される。

六 角川書店『日本の民話』―「再話論への試み」―

この全十二巻、各巻末に瀬川拓男による解説のページが用意されている。たとえば十巻には「為政者の抑圧を被つてきた民衆側にすれば、図式的な階級闘争原理ではおおい尽くせぬ暗黒面をも凝視してきた。そのまなざしが民話にはどのように反映しているのか」、あるいは「日本の権力に対する数千年にわたる死闘を展開してきた民衆」（第十巻 残酷の悲劇「解説 残酷に見る民族性」といった記述がある。第二巻では「資本主義的繁栄の「日本列島改造論」から、美しい日本をとりもどす「日本列島復興論」をかちとるためにも、今日ほど民話研究が望まれる時代はない」（第二巻 自然の精霊「解説 自然と人間との共存幻想」と述べている。

「猿蟹合戦」を「階級社会の発生を背景に、弱小種族間、ないしは階級間の横の連帯を呼びかけ、民衆の結束を迫る戦闘性」とみる瀬川は、その解説を「遠い昔、人類がまだ農耕経験を持たず、採集と狩猟を行なつ

ていた時期、原始的な動物民話は発生した」と書き起すが、二節めでは早くも「明治以降、大正期に事実あった話」として「水性のものの縁女である」とされた少女の水死を話題にしている（第一巻 動物の世界「解説 人類最初の動物民話」）。

ところで、見落としてはならないことは、各巻の解説の最後の節が「再話論への試み」の見出しで統一されていることである。

先ほどの十巻では「今われわれの手もとに残る数少ない残酷民話から、再話者は失われた階級性を奪還しなければなるまい」と述べ、「私」の自己幻想と「民話」の共同幻想とが火花を散らす衝突と交感によって、はじめて再話の仕事はささえられる」と断言する。表現し、運動してきた瀬川にとって「再話」は譲ることのできない自身の仕事の背骨であったのだろう。

大正期にあつて文字の文学の読者たちに「民話」という言葉を定着させたトルストイの非戦の思想、権力者、資本家との闘いとして始動した戦後の「民話」、発信されるものは大きく変わっているのだけでも、「民話」は「再話」と共にあつたと述べることは可能

である。

ただし、口承文芸研究をする学生たちとの交流を六〇年代に始めている松谷の「再話」の中には、作者の創作を控え伝承を尊重した描き方が生まれてくる。滝平二郎の切り絵が印象深い、風濤社のソノシート付きのシリーズとして、木下順二や斎藤隆介の作品と並ぶ松谷の『日本の民話』（一九六七）は、「語りによる民話」への第一歩だったと位置づけることができる^{【注14】}。考えるが、この点については、稿を改めることとする。

七 一九七〇年代における「現代の事実」

角川書店『日本の民話』第十二巻「現代の民話」が「現代民話考」への重要な礎だったとして、民俗学に向けられていたその頃の視線を、改めて確認しておこう。

吉本隆明「共同幻想論」が『文芸』に掲載されたのが、一九六六年〜六七年。単行本にされたのが六八年。三島由紀夫が『遠野物語』について「三嘆これ久しうした」と記したのが『波』一九七〇年一・二月号。三島が「アンアン創刊おめでとう」の文章を寄せたのが同年三月二〇日号を創刊号とする『an・an ELLI』

JAPON]。十月には「ディスクカバー・ジャパン」キャンペーンが開始される。

一九七三年七月五日号の『an・an ELLE JAPON』（第七九号）は「詩と民話の旅」を特集。遠野が四頁にわたり取り上げられている。書店で隣に並べられたであろう『るるぶ』（日本交通公社出版事業局）創刊号は同年六月二〇日の発売。若い女性の旅が、「民話」の意味を変えていた。

五〇年代に「民話」によって戦った瀬川にとって、当時の世の中は、「自然破壊の元凶である資本主義との対決を避け、レジャーとしての自然に逃避する傾向や、童心主義的な自然回帰の「ふるさと論」が、マスコミ文化の波に乗り日々盛んである」（第二巻「解説」）と感じられるものだった。

安保から経済成長へと世の中の関心が移行していく中であって、瀬川の「民話」は民衆の叫びであり続けた。大島廣志は瀬川の民話論を「批判的発想」と評している（大島・一九八一b）。

もちろん、そうした世の中が瀬川の訴えを出版物とすることを可能にしていた。それもまた間違いない

ことだ。より大きな影響力のある電波媒体の仕事もしながら、しかし、瀬川は叫び続けていたのだろう。瀬川は、出版物として「民話」を提示してはいたが、「上演」することこそが彼の生きざまであった。瀬川の原点を大島廣志は「人間に対する『怒り』と判断している」（大島・一九八一b）。瀬川の「民話」は闘いであり続けたのだと思われる。

現代社会と向き合う瀬川は、「残酷」をテーマにまとめる十巻「残酷の悲劇」も用意しているのだが、巻末「参考資料」の項に大島廣志は「資料的特徴を一言で述べるならば伝説が多い」と書き起こしつつ、「歴史と伝承の両面からまとめあげた『日本残酷物語』は、民衆の論理を強く打ち出した書として編者も参考にすることが多かった」と記している。

瀬川は「遠野物語に続く」ことを意識していた（第十二巻 現代の民話「解説 現代は民話によって再現できるか」）。河童が生まれれば斬り刻んで土中に埋めてしまふ、天狗は人々の手足を抜く、息子が母親を殺すこともある。それが『遠野物語』の事実だ。「ふるさと物語」という語が適切であったかはともかく、瀬

川も「現在の事実」に迫ろうとした。「郷土を」ではなかった柳田の民俗学との根本的な違いがそこにある。

松谷の民話も『現代民話考』巻頭の「序文 明日の民話のために」で強調されるように、「あつたること」である。「民話」は、「むかしむかしあるところ」の昔話研究と重なるものではない。

さて、瀬川がここで「残酷」という言葉を用いた事情として、先ほど触れた『日本残酷物語』が思い出される。^{〔註15〕}大島が認めていたとおり、五〇年代の『日本残酷物語』は「民話」の実践に重要な位置を占めている。民俗学に対する、当時の人々の関心を高めた書物として忘れるわけにはいかない大きな存在なのである。

顧みて、たとえばこのような記述を『日本残酷物語』の中に拾うことができる。

「第四部 保障なき社会」の第二章「ほろびゆくもの」は、まず「さびれゆく町村」として「水の動脈」の節を設けている。「東北本線は、はじめ栃木、壬生、宇都宮をむすぶ予定になっていたが、栃木町はこれにこぞって反対、この反対の先頭に立ったものは、地主たちと、このうずま川舟運の消滅にもつとも打撃をう

ける問屋衆であつた。またこれには農村も歩調をあわせた。汽車の振動のため、ニワトリが卵を産まなくなる。農作物が枯れてしまうなどの理由によるものであるが、とくに鉄道の敷地に予定される土地をもつ地主の反対は猛烈をきわめた。(略) 商人町栃木の歴史は、うずま川の歴史でもあつた。うずま川のゆえに繁栄し、うずま川のゆえに衰微の道をえらんだ」。

こうした話が、角川書店『日本の民話』に清水真弓(＝辺見じゅん)の再話により収載されていることは先ほど確認した。そして、今日では、各地から報告されたこれらの話は、地理学者の青木栄一により「鉄道忌避伝説」と命名され、史実である事例はごくわずかに限られると判断されている。

『日本残酷物語』第四部の帯には「身分社会から階級社会へ。富国強兵のひとすじ道に、ほろびゆく古い街道。鉄道は村の保障を破壊し開化は旧家の梁をうちくだく」とある。「現代篇」の二冊^{〔註16〕}では、戦後の日本社会を描く。工場労働者、タイピスト、水害、原爆、水俣病。炭鉱労働者、沖繩の青年、山岸会の集団生活、むすびはレッド・パージで追放された人々。

七〇年代に戻る。吉沢和夫は「いわゆるふるさと志向や本物志向といったような角度から民話を問題にしようとするアプローチの仕方がいかに今日の民話の問題を歪めているか」(吉沢・一九七八)と述べていた。

「伝説」の楽しみ方として「たずねる」という身体の働きがあること、戦前の行楽の流行の中で「民謡・伝説」という括りがあったこと、ディスクカバー・ジャパンキャンペーンと民話ブームの関係は、既に考察した(「野村・二〇一一」)。角川書店は各巻の前半を「○伝説散歩」として構成する『日本の伝説』シリーズ(一九七六―八〇)を刊行した。全五十巻のうち五巻に井出文蔵の切り絵が用いられている。この頃、井出は瀬川拓男の編む『季刊 民話』に多くの作品を提供していた。桜楓社(のちの、おうふう)の書物を見ても、加藤賢三『秘境のふるさと』ロマンと伝説をたずねて(一九七九)が、臼田甚五郎『子守唄のふる里を訪ねて』(一九七八)と同様に、井出文蔵の切り絵を装丁とし、ディスクカバー・ジャパンの空気に共鳴したシリーズ化を感じさせている。臼田の「あとがき」によれば、他の書に収めようとしていた文章を、出版社の要望で独

立した一書にしたとのことである。國學院大學教授が国文学研究書を主に扱う出版社から刊行する書物にさえにじみ出る「ふるさと志向」「民話ブーム」を、五〇年代の民話を生きた吉沢が不愉快に感じるのは当然だろう。

八 「公害を知らせる河童」―「現代民話考」の始動―

吉沢和夫が「今日の民話の問題を歪めている」との嘆きを載せた『民話の手帖』創刊号。松谷みよ子は、木下順二「民話管見」や山代巴「密造酒」への敬意を示しつつ、しかし、「権力に対する民衆の抵抗というテーマを持ち、民衆のエネルギーを発散させている話だけが「現代の民話」なのだろうか。そうではないだろうか」(松谷・一九七八a)と、新たな「民話」を宣言する。

松谷は、かつをさんやから聞いた福井の公害を知らせる河童の話に心を動かされた。『民話の世界』(一九七四)には「恐れやつつしむ心を忘れつつある」私たちの、自戒のメッセージとともに紹介されている。

『日本残酷物語』には竹内利美が「熊谷家伝記」を

資料に文章を記していた。たとえば、この「熊谷家伝記」に記される地域には、蓼を食わせたため河童が人との交流を断つことになったという伝承がある。これらの話と比較し、千葉徳爾のような「民俗学」的な研究^{〔註〕}をすることももちろん可能だった。しかし、「民話」はその道筋をとらない。松谷は『現代民話考』を書物としてまとめるにあたり、巻頭に「序文 明日の民話のために」を用意、第一巻の第一章冒頭には「河童考」をおいた。そのむすびの部分では、「マツカーサーにたたる」というケンムンの話に触れる。『季刊 民話』第八号（一九七六）、瀬川の没後に編まれた最終号に掲載された話である。瀬川の「民話」への思いを松谷は確かに受けとめている。では、その瀬川は、公害をどのように捉えていたのか。

『日本の民話』第十二巻「現代の民話」の中から、「公害の空の下で」（瀬川拓男）をみよう。「日本鋼管一の力持ち」だった「じいやん」の言葉には、美しい海を背景に煙突とともに近代化していった川崎の活力が見える。その孫「鉄也」は、公害ぜんそくに苦しみながら幼い命を落とす。「現在の事実」として、怒りだ

けが記録されているかのようである。奇跡も幽霊もそこにはない。瀬川は「再話論の試み」の中でこう述べる。この話が「もしも将来の民話に影響を与えるとすると、同じ公害の空の下に住む他地域の人びとが、共感を持って同じような〈公害民話〉を語りだしたときに生きてくる」と。

では、「河童考」の冒頭に目をやろう。『現代民話考』の世界に導く扉となるこの箇所において、松谷が取り上げたのは、「公害を知らせる河童」である。「カドミウム公害と河童という、まさに現代の民話の象徴ともいえる」話として、この話を位置づけている。「百年経つたら帰るさかい、水をきれいにしといてくれ」と日本人に反省を促した河童。瀬川の民話に導かれた松谷が、瀬川の叫びを継承しながら提示した新たな展望。自らの「民話」として発信する、「残酷」を越えた明日への可能性。それが『現代民話考』なのである。

はたして「学」とは、いかようなものであろうか。「民俗学」の可能性は、「もの好きの酔狂」のようなものと言われることさえもあつた中から紡がれたものだ。本稿に引用したように岩本通弥は市民運動を視野に入

れて民俗学という「学」を見つめ直している（岩本・二〇一二）。松谷を中心にして「葉書」という媒体によって行われた「現代民話考」は、資料提供者の喜びに支えられた「民俗学」構築の頃を思い出させるものとして見直すことも可能であろう。

【注】

- 1 宇津救命丸のコマーシャルが印象に残る。
- 2 『前衛』通巻三六四号（一九七四）に掲載。『文化評論』通巻一五四号（一九七四）に再掲。いずれも無記名。『蔵原惟人評論集』第八巻（一九七九・新日本出版社）所収。
- 3 瀬川の没後まとめられた『民話Ⅱ変身と抵抗の世界』（一九七六・一声社）に収載。なお、『民話と文学』第一〇号（一九八一）が「特集 瀬川拓男と民話」を組んでいる。
- 4 総販売元として「ほるぶ」の名が明示されているので、学校などに対し営業活動が行われたのだと思われる。
- 5 伝承者、採話者、再話者の名が各話に附記されている。なお、二〇一五年に刊行された『新版』日本の民話』では、「瀬川拓男、松谷みよ子編」の表示になる。
- 6 テープレコーダによる録音資料によって昔話研究の一生
- 7 大庭の聞き書きについては、吉沢和夫が一九六〇年に「ある聞き書の世界―石見日原村聞き書によせて」として（『歴史評論』一一八号）評している。
- 8 「一九六〇年度の太郎座（総会資料）」（松谷ほか・一九八二）、「松谷、瀬川の方の仕事として、出版関係での今年度の執筆予定」の三つめに、「坪田譲治『日本童話全集』の編集、執筆協力。特に日本の伝説について」とある。
- 9 國學院大學で「探訪」と呼称されることについて、飯倉義之は東京大学史料編纂所とつながりがあったためと記した（飯倉・二〇〇五）。
- 10 写真は『民話の手帖』第十八号（一九八三）巻頭「日本の民話の会 十五年の歩み」で確認できる。「特集 明日の民話を語る」は第三号（一九七九）。

面を開いた野村純一が一九六三年に『芸能』五巻十二号、十二号に「鷹匠口語り―沓沢朝治翁・述―」を掲載したことを思い出しておきたい。『忘れられた日本人』が宮本常一という個人の感じ方を媒体としているのに対し、テープ録音という客観性によって「年よりたち」を記録・表現しようとした試みが「鷹匠口語り」だったとも言えるだろう。

- 11 かつて、「再話」についても、伝承との二項対立で考えられていた。今日の「再話」については、たとえば『口承文芸研究』三四号(二〇一一)に「シンポジウム／「再話」論の射程」が報告されている。
- 12 角川春樹編集長から松谷に提案された企画に対し、松谷が瀬川との共編を希望したのだという〔松谷ほか・一九八二〕。
- 13 清水真弓は「現・辺見じゅん」〔大島・二〇〇九〕。角川文庫として『日本の民話』全十二巻が刊行された際には、「松谷みよ子・瀬川拓男・辺見じゅん」の著作とされている。
- 14 鳥越信は、「語り芸術の再創造」と評価している。「私がこんどでる風濤社の民話ソノシートに期待をもつのは、まず、松谷さんが、文学への再創造ではなく、語り芸術への再創造を意図したこと、次に、語り手が、効果音や歌曲などを排して、声だけの語りに徹したこと、の二点で、これまで述べてきた私たちの要求にこたえてくれていると考えるからです」。(鳥越信「お母さんがたへ」『宇野重吉の語りきかせ 日本民話』(松谷みよ子作 滝平二郎画・一九六七・風濤社)
- 15 もちろん、大島渚の映画の題名、ヤコベッティの映画の邦題、などと並べて見れば、「残酷」という言葉にも商業的な側面も窺われる。しかし、「現代の民話」が、民俗学が切り落とした「民衆」の生きざまと向き合う試みであったこと、「民話」という言葉によって学問が世の中に開かれていったことを考えてみれば、そして、その延長線が「現代民話考」に到達したのだと考えてみれば、商業的な営みを無視して学問の道筋をたどることはできない。そもそも、七〇年代、八〇年代の口承文芸研究の基盤となる『日本昔話大成』全十二巻の刊行も、角川書店の採算の判断を経てのことである。
- 16 平凡社ライブラリー版だけを見ていると見落としてしまうことなのであるが、『日本残酷物語』は予定されていた全五巻では完結していない。第五巻に折り込まれた広告には「封建の残滓に流亡する人々 近代に圧殺された日本の底辺」の見出しにより、「全国読者のご要望により、日本の近代にひそむ残酷に照明をあてる『現代篇』二部作を続刊！」が告知されている。民俗学の範囲からはみ出る「現代」を語る物語がそこにあったのである。
- 17 早川孝太郎「天竜川流域各地の河童其他」〔河童俗伝〕

の項に並べられた報告の一つとして)『民族』第三卷第五号(一九二八)、『早川孝太郎全集』第三卷(一九七三・未来社)所収。なお、『熊谷家伝記』の記事は「龍神の遣はしめ」となっている。

- 18 千葉徳爾「田仕事と河童」(『信濃』第十卷第一号)一九五八

19 『川崎の世間話』(一九九六・川崎市市民ミュージアム)として報告したが、私自身も一九九五年に川崎市で聞き取りに歩いた。金と命の「こうかん」会社。その給料が出た日の堀之内の賑わい。震災後に自警団が行ったこと。朝鮮半島からの労働者がいるから日本鋼管にはB二九が爆弾を落とさなかったという人々の解釈。多摩川に鮭を呼び戻そうという運動。「岸辺のアルバム」の遠因として、川崎の人々の命がけともいえる水争いがあったこと。「昔話・伝説」研究では、川崎の人々の生きざまを伝えることはできない。

【文献】

阿部軍治 一九八九『徳富蘆花とトルストイ―日露文学交流の足跡―』彩流社

網野善彦 一九八四「解説」(宮本常一『忘れられた日本人』岩波書店(岩波文庫))

飯倉義之 二〇〇五「探訪の技術史―国学院大学学生研究会口承文芸探訪の五〇年―」(『学生研究会による昔話研究の五〇年―フィールドワークの記録と記憶―』国学院大学説話研究会 国学院大学民俗文学研究会 O B有志)

石井正己 二〇〇〇「『遠野に生き続けた昔』の役割」『常民文化』第一〇〇号(『遠野の民話と語り部』二〇〇二 三弥井書店 所収)

犬田卯 一九五八『日本農民文学史』(小田切秀雄編)農山漁村文化協会

岩田重則 二〇一四『いま読む―名著 日本人のわすれもの宮本常一『忘れられた日本人』を読み直す』現代書館

岩本通弥 二〇一二「民俗学と実践性をめぐる諸問題―『野の学問』とアカデミズム」(岩本通弥・菅豊・中村淳 編『民俗学の可能性を拓く―『野の学問』とアカデミズム』青弓社) 大島廣志 一九八一 a 「瀬川拓男のあゆんだ道(民話を中心に)―『民話と文学』第一〇号

大島廣志 一九八一 b 「怒りからの出発―瀬川民話論の基底―」『民話と文学』第一〇号(『民話―伝承の現実』二〇〇七・

三弥井書店 所収)

巻 日本の民衆文芸「東京大学出版会」

大島廣志 二〇〇九「ある軌跡―『日本民話の会通信』二〇二号(『聴く 語る 創る』二八号・二〇一九に再収)

松谷みよ子 一九七四『民話の世界』講談社
松谷みよ子 一九七八a「現代民話考 その一 資料の中の現代民話」上下二つの口」によせて『民話の手帖』創刊号

大月隆寛 一九九五「解説―かつて「残酷」と名づけられてしまった現実」(『日本残酷物語』平凡社(平凡社ライブラリー))
小熊英二 二〇〇二『民主』と(愛国)―戦後日本のナショナリズムと公共性―』新曜社

松谷みよ子・曾根喜一・水谷章三・久保進 編 一九八二『戦後新聞』一〇月一六日

加藤一夫 一九二八「農民文芸の正系」『農民』(第二期)第一巻第一号

後人形劇史の証言―太郎座の記録― 一声社
松谷みよ子 二〇〇七『自伝 じょうちゃん』朝日新聞社

坪田譲治 一九七二「対談 II(菅忠道との対談・一九六九) 編者代表 関英雄・水藤春夫」『坪田譲治童話全集 別巻 坪田譲治童話研究』岩崎書店

宮本常一 一九五八「伝承者の系譜」『文学』第二六卷八号(庶民の発見)一九六一・未来社)

野村典彦 二〇一一『鉄道と旅する身体の近代―民謡・伝説からデイスカバー・ジャパンへ―』青弓社

宮本常一 一九六一「生活規範としての民話」(『庶民の発見』一九六〇年)に寄せた「民話の意義」を加筆)

野村典彦 二〇一一「民話(はなし)という記述(かきかた)―大庭良美の「聞き書き」から―」『世間話研究』第二二号

民話の会 一九五六「民話の発見」大月書店
柳田国男 一九三一「昔話採集者の為に」『旅と伝説』第四巻第四号(『昔話覚書』一九四三・三省堂 所収)

野村典彦 二〇二〇「大正・昭和初期の「民話」とその思想―水野葉舟や農民文芸運動を視野に―」『口承文芸研究』第四三三号

吉沢和夫 一九五四「民話」『日本文学史辞典』日本評論新社(「民話の問題点」として民話の会編『民話の発見』一九五六・大月書店に再収)

益田勝実 一九五七「民話・その伝統」(『日本文学講座第三

吉沢和夫 一九七八「民話をめぐる今日の状況」『民話の手帖』
創刊号

吉沢和夫 一九八五「民話運動からみた「語り」」(野村純一・
佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂)

吉沢和夫 一九九一「民話の伝承と再話」『日本児童文学』
第三七卷第二号「特集 今、民話に問われているもの」

吉沢和夫 二〇〇三「民話の半世紀をふりかえる」(聞き手
米屋陽一)『聴く語る 創る 別冊 特集 吉沢和夫』日
本民話の会